

第141回

日耳鼻埼玉県地方部会学術講演会

プログラム

日 時：令和4年10月30日（日）

場 所：埼玉県県民健康センター 2階 大ホール

さいたま市浦和区仲町3-5-1 電話048-824-4801

参加費：1,000円

1. 開会

2. 第140回学術講演会学会賞授与式 12:55～13:00

3. 一般演題（第1群） 13:00～13:40

4. 一般演題（第2群） 13:40～14:20

— 休 憩 — （10分） 14:20～14:30

5. 一般演題（第3群） 14:30～15:00

6. 一般演題（第4群） 15:00～15:30

— 入室確認 — （10分） 15:30～15:40

7. 領域講習（60分） 15:40～16:40

「口腔癌治療の現状と問題点～将来への展望」

埼玉医科大学国際医療センター 頭頸部腫瘍科・耳鼻咽喉科

教授 蝦原 康宏 先生

8. 閉会

この度予定しております領域講習は日本専門医機構耳鼻咽喉科領域専門医委員会において耳鼻咽喉科領域講習として承認されております。

日耳鼻専門医に該当する先生におかれましては、「日本耳鼻咽喉科学会会員カード（ICカード）」を忘れずにご持参ください。

※演題発表時間7分・質疑応答3分（計10分）

※演題番号前に☆が付いている演題は、学会賞対象演題です。優秀賞を受賞された会員におかれましては、ご発表内容を翌年の埼玉耳鼻会報に掲載するため、約1000字程度の抄録をご提出ください。

一般演題【発表時間 7分・質疑応答 3分 計 10分】

第1群「悪性腫瘍」（13：00～13：40）

座長：井上 準 先生
（埼玉医科大学国際医療センター）

1. 当科での局所進行頭頸部癌に対する PCE 導入化学療法の検討

演者：○民井智、苦瓜治彦、福島亮、大野貴史、吉田祥徳、小出暢章、白倉聡、別府武
所属：埼玉県立がんセンター 頭頸部外科

ドセタキセル、シスプラチン、5-FU (TPF)療法 は、局所進行頭頸部扁平上皮癌 (HNSCC) に対する導入化学療法 (ICT)として、現在の標準レジメンとされているが、重度の毒性による腎機能障害や血球減少により、CRT でのシスプラチンを減量せざるをえない症例があることなどが問題となる。

パクリタキセル、カルボプラチン、セツキシマブ (PCE)療法は、新しい ICT レジメンとして重篤な有害事象が少なく、高い有効性を示すとされる報告が散見される。

今回我々は当科で 2021 年 10 月～2022 年 8 月までに HNSCC に対して ICT-PCE を施行した患者 6 例を対象に、RECIST と CTCAE を用いて 2 サイクルの PCE レジメンの有効性と有害事象を検討した。

症例は男性 4 例、女性 2 例、年齢の中央値は 67 歳 (46～ 74)で、原発巣は中咽頭 1 例/下咽頭 4 例/上顎洞 1 例であった。

全例が 2 サイクルの PCE 療法を完遂した。治療後評価は全例 PR であり、奏効率は 100% であった。

Grade 3 の有害事象は好中球減少を 1 例 (16.7%)認めたのみで、Grade4 の有害事象は認められなかった。

ICT-PCE 前後で eGFR が 5 以上低下した症例はなく、全例でシスプラチンを使用した CRT または手術への移行が可能であった。

今回の検討では PCE レジメンは高い奏効率を示し、毒性も低く、HNSCC の ICT として有用である可能性が示唆された。

☆2. 頭頸部癌に対する PCE 療法による導入化学療法の有用性に関する検討

演者：○坂本 光， 栃木康佑， 穴澤卯太郎， 西島嘉容， 田中康広
所属：獨協医科大学埼玉医療センター耳鼻咽喉・頭頸部外科

頭頸部癌に対する導入化学療法は TPF 療法 (ドセタキセル、シスプラチン、5FU)が標準レジメンとされてきたが強い毒性が問題視されてきた。近年新しい導入化学療法のレジメンとして PCE 療法 (パクリタキセル、カルボプラチン、アービタックス)の有効性が報告された。しかし、PCE 療法による有害事象の発生頻度や腫瘍縮小効果に関する報告は少なく不

明な点が多い。

そこで今回、当院で PCE 療法を行なった頭頸部癌患者 32 症例を対象に診療記録を後方視的に調査し、有害事象の発生頻度や治療効果について検討した。

対象患者の原発部位は中咽頭が 18 例 (56.3%) と最も多く、病期は I 期 7 例、II 期 6 例、III 期 6 例、IV 期 13 例であった。平均 5.8 週間 PCE 療法が施行されており、8 例 (12.5%) で G3 以上の有害事象が認められた。PCE 療法実施中に腫瘍の縮小を認めた症例が 23 例 (71.9%) で腫瘍の増大を認めた症例は 1 例 (3.1%) のみであった。

以上のことから、PCE は比較的安全に実施が可能で腫瘍縮小効果も得られる導入化学療法のレジメンと考えられた。今回、本研究成果に加え PCE 療法に関して文献的考察を行ったため報告する。

☆ 3. 喉頭軟骨肉腫 3 手術例の経験

演者：○佐藤 尊陽、蝦原 康宏、佐藤 瞭、澤田 政史、金本開、井上準、松村聡子、中平 光彦、菅澤 正

所属：埼玉医科大学国際医療センター 頭頸部腫瘍科・耳鼻咽喉科

【はじめに】

喉頭軟骨肉腫は稀な疾患で、喉頭全摘術を主とした外科的切除が第一選択となることが多く、遠隔転移は少なく予後良好な疾患と考えられている。本邦での報告は未だ少なく、当院にて根治的手術を施行した 3 症例を報告する。

【対象と方法】

各症例の年齢と腫瘍進展範囲について、症例 1 は 70 歳，28mm 大，輪状軟骨左側に限局、症例 2 は 55 歳，35mm 大，甲状軟骨左側に限局、症例 3 は 66 歳，35mm 大，輪状軟骨後部から両側に進展していた。術前診断は、症例 1, 3 は生検にて、症例 2 は画像上判断された。症例 1, 2 は喉頭部分切除術、症例 3 は喉頭全摘術を施行した。

【結果】全症例とも断端陰性で補助治療なし。術後は 2 年-7 年経過し、全例再発なし。喉頭温存した 2 例は日常生活に支障を認めなかった。

【考察と結論】

今回症例より喉頭軟骨肉腫の治療において喉頭温存可能な症例があることが示された。喉頭全摘術の適応として、再発例、腫瘍が軟骨の 1/2 以上に及ぶ例が報告されている。当院でも軟骨片側に腫瘍が限局した 2 例で部分切除術を行った。全症例とも再発なく経過している。腫瘍が軟骨片側に限局している場合には積極的に喉頭を温存することを検討すべきと考える。

☆4. 完全内蔵逆位による非反回神経を疑い、術中持続迷走神経モニタリングを使用した 1 例

演者：○福島 亮、白倉 聡、苦瓜治彦、大野貴史、吉田祥徳、民井 智、小出暢章、別府 武
所属：埼玉県立がんセンター 頭頸部外科

【はじめに】甲状腺手術では反回神経の正確な同定が必要となるが、走行異常の非反回神経症例において術後の声帯麻痺になる危険性は高いといわれている。今回我々は、完全内蔵逆位の甲状腺癌症例に対して術中持続神経モニタリングを使用した 1 例を経験したので報告する。

【症例】患者は 54 歳の女性。7 ヶ月前に右頸部腫脹を自覚し、3 ヶ月前に前医受診し、US にて甲状腺右葉に内部不均一な 30mm 大の腫瘤性病変認め、FNA にて乳頭癌(右葉 cT2N0M0) の診断で、当科紹介となった。CT にて甲状腺右葉下極に造影効果不良な 26×23mm 大の腫瘤を認めた。単純レントゲンにて完全内蔵逆位を認め、非反回神経の可能性があると考え術中持続迷走神経モニタリングを使用し、甲状腺右葉切除+右気管前傍郭清を施行した。

【考察】過去の報告では、非反回神経は内蔵逆位症による右側大動脈弓に最も頻度が高いとされ、その確率は 0.3-1.6%であった。本症例においては、完全内蔵逆位であることから非反回神経の可能性を予測し、術中持続迷走神経モニタリングが有用であったので、術中所見や文献的考察を加えて報告する。

第2群「気道・咽頭・嚥下」(13:40～14:20)

座長：田中 是 先生

(埼玉医科大学総合医療センター)

☆5. 気管切開から数年後に気管腕頭動脈瘻をきたし救命し得た1例

演者：○岩崎昭充、海邊昭子、井原伽奈子、栃木康佑、田中康広

所属：獨協医科大学埼玉医療センター 耳鼻咽喉・頭頸部外科

気管腕頭動脈瘻は気管切開術後に生じる致命的な合併症である。急速に出血性ショックや窒息に至るため早急に有効な処置を行う必要があるが、発生頻度が低く遭遇することは少ない。今回、気管切開実施後数年経過した後に気管腕頭動脈瘻を来し、外来での迅速な処置および外科的治療で止血された1例を経験した。

症例は28歳男性。歯状核赤核淡蒼球ルイ体萎縮症で小児科フォロー中に呼吸不全を起こし、20歳の時に他科にて気管切開術が実施され、外来フォローされていた。初診1ヶ月前頃から体動時や咳嗽時に気管孔から出血を認め、初診当日も出血を認めたため精査目的で当科紹介となった。診察時気管および気管カニューレ内には血液凝固塊を認めず、カニューレを抜去したところ気管孔から大量の出血を認めた。カニューレを再挿入し気管前壁の出血部を圧迫するように徒手的に固定したところ一時的に止血が得られ呼吸状態も安定した。造影CTにより気管腕頭動脈瘻と診断し心臓血管外科にてバルーン拡張による腕頭動脈閉塞および腕頭動脈離断術を実施し止血を行った。

本症例の治療経過に気管腕頭動脈瘻に対する有効な処置や治療について文献的考察を加えて報告する。

☆6. 気管切開後に気管孔閉鎖できなかつた症例の検討

演者：○杉原怜¹⁾、原睦子¹⁾、安田大成¹⁾、米山英次郎¹⁾、長野恵太郎²⁾、肥田和恵¹⁾、
木下慎吾¹⁾、三ツ村一浩¹⁾、大崎政海¹⁾、徳永英吉¹⁾、久場潔実³⁾、畑中章生³⁾

所属：1)上尾中央総合病院耳鼻咽喉科 2)彩の国メディカルセンター耳鼻咽喉科
3)上尾中央総合病院頭頸部外科

長期気管内挿管を契機として気管切開を行った後に、原疾患が寛解を得た場合、気管孔閉鎖は順調になされるはずである。カニューレを抜去できない場合には、従来、抜去困難症という定義がなされている。近年、当科の実臨床において、長期挿管後の気管切開後に気管孔閉鎖を順調になしえない症例が散見された。保存的加療で改善を認めない気道狭窄への対応は症例ごとに様々であり、時に対応に難渋する。

2020年1月から2022年9月の間に他科依頼をうけて悪性腫瘍以外の理由で行った外科的気管切開術74例のうち、気管孔閉鎖できなかつた5例を検討した。いずれも10日以上挿管期間、挿管となつた原疾患が心血管疾患であった。気管孔閉鎖ができない理由は、両側反回神経麻痺、声門下癒痕、気管内肉芽であった。遊離肋軟骨移植を伴う気管壁再建を含

め複数回手術での閉鎖を目指している 1 例を提示する。

長期挿管を契機に気管切開を行い、気管孔閉鎖できない 5 症例の報告と当科での対応について文献的考察を踏まえ提示する。

7. 多発脳神経麻痺の加療中に生じた咽後膿瘍の 1 例

演者：中村 吉成¹⁾、大木 幹文¹⁾、大橋 健太郎¹⁾、山本 賢吾¹⁾

所属：北里大学メディカルセンター 耳鼻咽喉科

咽後膿瘍は稀な疾患であり、乳幼児に多く成人に発症することは少ないとされている。今回、VZV による多発脳神経麻痺に対して、ステロイドパルスにより加療を行っていた患者の咽後膿瘍の 1 例を経験したため報告する。

症例は 62 歳の女性で、咽頭痛及び右カーテン兆候・右声帯麻痺を来し、入院で精査を行い、VZV による多発脳神経麻痺と診断された。ステロイドパルス及び抗ウイルス薬で加療を行っていたが、咽頭痛の増強及び咽頭後壁の腫脹を認め、経口腔的に切開を行ったところ、排膿を認め、咽後膿瘍の診断となった。排膿処置及び抗菌薬・免疫グロブリン製剤で治療し、治癒した。

今回の症例では、多発脳神経麻痺により経口摂取不良であり経鼻胃管を挿入していた。また、入院時より咽頭痛を認めており、咽頭後壁の発赤を認めていた。ステロイドパルスにより加療を行っていたことから、経鼻胃管挿入による咽頭損傷や VZV 再活性化による咽頭炎に続発して咽後膿瘍が生じた可能性が疑われた。

ステロイドパルスなど、免疫機能の低下を生じるリスクがある加療を行う際には通常の経過では問題の生じないような創傷や炎症でも重篤な疾患につながる可能性があり、注意が必要である。

☆ 8. 当科における嚥下造影検査の検討

演者：○竹中 達也、宇野 光祐、松野 直樹、谷合 信一、荒木 幸仁、塩谷 彰浩

所属：防衛医科大学校耳鼻咽喉科学講座

嚥下障害は患者の健康、QOL に重大な影響を与えるためその評価・治療は重要である。当科では週に 2 回、嚥下造影検査を施行し自科、あるいは他科で嚥下障害を疑われた症例の嚥下機能評価、食事方法や食形態の提案、言語聴覚士の介入の必要性を評価している。本検討では 2021 年 1 月から 2021 年 6 月までの間、他科から嚥下障害を疑われコンサルトされたのべ 59 例、実患者数 48 例について嚥下内視鏡検査 (VE)、嚥下造影検査 (VF) を用いて評価を行い科別・疾患別に傾向と食事に対する当科的な介入について検討した。依頼科の内訳は神経内科 23 例、その他内科 4 例、消化器外科 7 例、心臓血管外科 3 例、小児科 3 例、呼吸器外科 2 例、総合臨床部、救急部、肝胆膵外科、脳神経外科、産婦人科、精神科が各 1 例であった。依頼理由の内訳は、急性期疾患で経口摂取可否に関する依頼が 22 例、

進行性の慢性期疾患で依頼時点の嚥下機能評価に関する依頼が 26 例であった。当科における嚥下機能評価を経て適切な食事方法や食形態の提案を行うことにより、安全に経口摂取が継続できる症例は多く、嚥下機能評価の重要性が再認識される結果となった。

休 憩（14：20～14：30）

第3群「鼻副鼻腔」（14：30～15：00）

座長： 増田 毅 先生
（増田耳鼻咽喉科医院）

☆9. ベタメタゾン点鼻の長期使用により副腎皮質機能低下を来した好酸球性副鼻腔炎の2例

演者：○久保木諒¹⁾、野村文敬¹⁾、柳橋賢¹⁾

所属：1) 草加市立病院耳鼻咽喉科

好酸球性副鼻腔炎の増悪時にベタメタゾン点鼻による治療がしばしば行われている。今回我々は好酸球性副鼻腔炎に対しベタメタゾン点鼻を長期使用したことにより副腎皮質機能低下を来した2症例を経験したので報告する。症例はそれぞれ62歳女性、51歳女性でいずれもベタメタゾン点鼻を2週間に1本のペースで3年間連用したことによりコルチゾールが検出感度以下となりヒドロコルチゾン内服による加療を要した。ベタメタゾン点鼻に関しては適正な用法用量を遵守した場合でも長期で連用することにより副腎皮質機能低下を来した報告が数多く存在する。外因性ステロイドによる副腎不全のメタアナリシスでは点鼻ステロイド使用により4.2%の症例で副腎不全の発症があったことが報告されておりその頻度は決して少なくない。一方で副腎不全は疲労感、食思不振、腹痛、嘔吐など非特異的な症状を呈することが多く、また副腎皮質機能低下を来していても無症状であることも多いためベタメタゾン点鼻を使用している際には副腎不全の可能性を常に念頭におき、疑った場合は内分泌学的検査を積極的に検討する必要がある。

☆10. 当科における好酸球性副鼻腔炎手術症例の臨床的検討

演者：○柳橋賢¹⁾、野村文敬¹⁾、久保木諒¹⁾

所属：1) 草加市立病院耳鼻咽喉科

好酸球性副鼻腔炎は再発性、難治性のある疾患であり、的確に手術がおこなわれたとしても、術後早期に再発し治療に難渋することがある。今回、当科での好酸球性副鼻腔炎手術症例の術後成績を検討した。2016年8月から2021年9月までに初回手術を施行した29症例のうち9例で術後早期に再発を認め、鼻腔内局所ステロイド治療やデュピルマブ治療が開始された。術後の再発因子の評価として、これらの症例を対象に年齢や喘息の既往症、血中好酸球数、術前CT画像評価などについて検討しつつ、若干の文献的考察を含めて報告する。

1 1. 局麻で行える鼻科手術その1 鼻腔形態改善手術

演者：○中上桂吾

所属：戸田笹目耳鼻科

当院は無床診療所で日帰りの耳と鼻の日帰り手術を行っている。開院後月に12～16症例の手術をおこなっており、術式別集計では50程度の鼻科手術を行っている(2021年度は術式別で666件)。2022年7月以降は全症例を局所麻酔で行い、2023年からは全身麻酔も再開する。

現在多くの施設では鼻科手術は全身麻酔で行われている。しかし、鼻科手術や耳科手術は本来局所麻酔で行われており、全身麻酔に比した局所麻酔によるメリットは存在する。

鼻腔形態改善手術においては、術中に患者の症状を確認しながら微調整が可能である。今回は鼻腔形態改善手術を局所麻酔で行う場合の手術の実際、注意点を含めて紹介したいと思う。

第4群「難聴・めまい」(15:00~15:30)

座長：大橋 健太郎 先生
(北里大学メディカルセンター)

☆12. マスクにより学校生活の聴取困難が生じている一側性難聴児の現状と対応

演者：○谷口貴哉, 金沢弘美, 島崎幹夫, 高橋英里, 澤 允洋, 江洲欣彦, 鈴木政美, 吉田尚弘

所属：自治医科大学附属さいたま医療センター耳鼻咽喉・頭頸部外科

COVID-19の影響でマスク着用生活が浸透し、難聴者はマスクによる声量の減衰に加え、視覚による読書の併用ができず大きなストレスを抱えている。学校という雑音が多い中で1日の大半を過ごしている難聴児にとっても大きな問題となっている。

当科外来で聴力経過観察中の一側性難聴児32名(7歳~20歳、軽度難聴14名、中等度難聴11名、高度難聴7名)、両側難聴児6名、正常コントロール児15名に雑音下聴取や音源定位、実際の学業に関するストレス変化についてVASを用いたアンケートを行った。さらにマスク着用生活後に補聴器装用に至った9名の児童に対しては装用前後で比較検討した。

一側性難聴児は、マスク着用前から雑音下聴取や音源定位の困難があり、マスク着用生活後に悪化がみられた。これらは正常・両側難聴児童よりも強く認められた。また補聴器装用に至った軽度~中等度一側性難聴児8名はマスク着用前よりも改善がみられた。

保存的な経過を希望されていた一側性難聴児であっても、小児は補聴器費用助成制度も利用できることから、特にマスク着用の生活下では試聴などを通じて補聴器装用を提案することが望ましいと考える。

13. 迅速CTP検査法の開発

演者：○丹沢泰彦、松田帆、澤田政史、北原智康、吉村美歩、関根達朗、細川悠、中嶋正人、加瀬康弘、池園哲郎

所属：埼玉医科大学病院 耳鼻咽喉科

GTP検査は、2018年度版急性感音難聴診療の手引きのなかで外リンパ瘻確定診断法の一つとして診断基準に明記されている。ELISAを用いた外リンパ瘻の多施設共同研究の成果により、外リンパ瘻の特徴的症候や誘因の重要性が明らかになりつつある。その結果、外リンパ瘻の診療の現場で有用であることが認められ、2022年7月1日にGTP検査は保険収載され、今後、全国の多くの施設でGTP検査が実施可能となる。

ELISA検査法は、高感度、定量的評価が可能であるというメリットがある一方、検体提出前にサンプル処理が必要で、検査結果判明まで、最短でも2日間、実際に検査センターとのやりとりがある場合には数週間かかってしまうといったデメリットがある。急性の外リンパ瘻では早期診断・早期治療を行うことで予後の改善が望める疾患であるため、より

短時間で検査結果が判明する検査法の開発が期待されている。現在我々は、免疫クロマト法に着目し、短時間、on-site で結果確認が可能なCTP検出試薬の開発を行っており、CTP検査の現状とこれからの展望について発表する。

14. 癒着性中耳炎，術後乳突洞障害の治療戦略～聴力改善手術を局麻で行うメリット～

演者：○中上桂吾

所属：戸田笹目耳鼻科

癒着性中耳炎は一般的に成功率が低い疾患として知られている。

症例 60代女性 30年前に都内大学病院にて手術。その後、定期的なクリーニング目的で近医耳鼻科を通院していた。耳処置のたびにめまいあり。

初診時所見 鼓膜の後上部は癒着，あぶみ骨上部構造は肉芽を伴い癒着した鼓膜に存在していた。鉗子で軽く押すとあぶみ骨の動きは良好であった。

CWD後の乳突腔は高いfacial ridgeが残り，全体が可視できない構造。全体に湿っていた。

治療戦略 あぶみ骨周囲が含気化しておらず，伝音再建は二期的に行う必要がある。

本症例の経過を紹介して，若干の文献的考察を交えて報告する。

入室確認（15：30～15：40）

領域講習（15：40～16：40）

座長：別府 武 先生
（埼玉県立がんセンター）

「口腔癌治療の現状と問題点～将来への展望」

埼玉医科大学国際医療センター 頭頸部腫瘍科・耳鼻咽喉科

教授 蝦原 康宏 先生

退室登録（16：40～）

日本耳鼻咽喉科学会埼玉県地方部会